

1 目指す学校像

- 教育の保障と学力の向上。
○内面（心）へのアプローチ。
○日常のリズムや風を届ける。

2 本年度の教育目標

- 1 重複障害のある子どもの学習づくりと、そのための効果的な教材・教具の開発を行う。
2 南国市との連携を中心として分校のセンター的役割を果たす。
3 教科以外の指導の在り方について見直しを行い、その充実を図る。

評価者
○児童生徒 10名
○保護者 11名
○病院関係者 4名

評価の基準

- A：設定した目標を十分達成できた。
B：設定した目標に対し、ほぼ達成でき、次年度の課題が明確になった。
C：設定した目標に対し、成果が不十分であり、課題が残った。
D：設定した目標に対し、ほとんど達成できない。

3 評価

項 目	昨年度の課題	本年度の目標	目標達成のための手だて	自 己 評 価	学校関係者評価	今後の課題		
1 重複障害のある子どもの学習づくり	昨年度の目標はほぼ達成できたが、さらなる開発に向け院内の専門家と連携し、工夫・改善する必要がある。また、研究成果を活用できるように整理し、Webを通じて情報発信できるように取り組みを進める必要がある。	・児童生徒の実態に応じた教材・教具の開発を進め、指導方法について研究する。 ・開発した教材・教具をHP上で情報発信する。	・児童生徒の実態に基づいた教材のアイデア提案、関連情報の収集を行い、ワンクリック教材を2つ以上開発する。 ・開発した教材・教具、アプリケーションソフトについて整理し完成度を高める。	全員で児童の授業に関わり、実態把握の共有を図った。工科大学での研修を実施し、新しいソフトを開発することもできた。近隣の関係機関（工科大学、高知東工業高校）とも連携した取組を始めることができ、目標を達成できた。	A	チームという考え方で地域の関係機関等の協力を得ながら、年々レベルアップにつなげている。児童生徒の実態に即した教材開発に向けた取組は十分達成できている。今後も、児童生徒の社会性の向上を目指し、続けてほしい。	A	分校内だけでは限界がある。たとえば外部の専門機関やWeb上の情報など有効的に活用する必要がある。また、全員での取組を充実させるためには、実態把握に関する定期的な話し合いを計画し、課題の共有を図る必要がある。
2 特別支援教育における分校のセンター的役割	病弱教育に関わる教育相談や退院（転出）後の児童生徒の実態把握や支援等に取り組んできた。また、昨年は南国市の特別支援教育幾研究会からの支援の要請もあり、地域（南国市）からのニーズは高い。応えるべく取り組みを充実させる必要がある。	・地域支援に対応できるよう校内研修の充実を図る。 ・南国市との連携を深める。	・校内での研修（特別支援教育全般）や任意の研修成果を共有し、研修の充実を図る。 ・県の事業を活用した地域支援の実施、南国市特別支援教育研究会（病弱部会）への協力など地域支援に取り組む。	校内での研修や夏季休業中に行われた任意の研修の結果を共有する機会を設けたが、地域支援に関する専門性の構築までには至っていない。しかしながら、近隣の小学校の校内研修会やケース会等に出向し、地域支援の具体的な取組をスタートさせることができた。	B	支援の実際に関しては相手があることなので、実施した数の問題ではない。取組としては目標は達成できているためAが妥当と思われるが、学校全体としての専門性の構築に向けた校内体制が十分でなかったという自己評価を尊重してBと評価する。	B	特別支援教育に関する分校教員全員の専門性の向上に努めなければならない。また、センター的な役割を果たすという意味で、分校の役割を地域に明確に周知する必要がある。地域への支援に関しては、出向するだけではなく、校内研修の案内など分校からの働きかけも計画していかなければならない。
3 教科以外の指導の充実	教科学習の指導と同等にきわめて重要な課題である。児童生徒が自己肯定感を持って治療に向き合えるよう取り組みを充実させる必要がある。また、前籍校復帰へ向け前籍校との連携を一層強める必要がある。	・課外活動を新設する。 ・「交流及び共同学習」について実施可能なケースで取り組む。	・実施可能な課外活動を検討し着手する。 ・「交流及び共同学習」のあり方（目的、手段、校内体制等）について検討し、実施可能なケースで実施する。	課外活動の時間を新設し取り組みをスタートさせた。参加した児童生徒や興味を示した活動は限られたため、子ども同士の豊かな関係づくりにまで広げたり、児童生徒の自己肯定感を高めるまでには至らなかったが、異年齢の集団の場合として設定し、放課後の時間を共有する機会を位置づけることができた。	A	課外活動を楽しみし、満足につながっている児童生徒も多い。 「交流及び共同学習」についても、可能なケースはすべて実施し、スムーズな前籍校復帰につながっている。目標としては達成できているため、Aが妥当である。	A	課外活動については内容の見直しが必要である。また、実施可能な交流及び共同学習についても取組内容の充実を図らなければならない。